慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マーシアル教授のリカルド価値学説批評（上）
Sub Title	
Author	鈴木, 清吉
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.8 (1919. 8) ,p.1075(123)- 1081(129)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190801-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

or the labor which it will command; yet they are essentially different."(4)

と言へるが如く、生産に費されたる勞働と財にて支配せらるべき勞働とは全く別種のものとせり。以下若干の學者の所説を參考しながらスミスが其何れに重きを置けるかを研究せんとす。

（註一）Smith:—op. cit. vol. i. p. 32.
（註二）Whitaker:—op. cit. p. 21.—
（註三）Smith:—op. cit. vol. i. p. 32.
（註四）河上博士、「アダム・スミスの價値論に就いて」三田學會雜誌第七卷第一號七二—三頁より引用す。

（十四）

ジェームス・ボーナーは其論文「アダム・スミス」の中、價値の標準を論ぜる條に於て銀は短期の、穀物は長期の價値標準に適し、勞働は不變の價値標準なりとのスミスの説を紹介し、其勞働の意味を次の如く解せり。

"By 'labor' here Adam Smith means the labor purchased by an article, not the labor involved in the making of the article; but he finds it hard to hold this distinction, and to keep the senses of the words clear."(1)

而して、其好著 Philosophy and Political Economy に於ては「アダム・スミスはフィジオクラアトと同じく、使用價値を研究することなく、其注意を全然交換價値に向けたり。彼は、交換價値の通常の標準尺度は貨幣なりとせり。……されどすべてのものの購買力の眞の秤量標準は貨幣によりて表はされたる價格にあらずして、購買者が其財を以て支配し得る勞働の分量なりとしたり。販賣者の見地よりすれば、彼の販賣する貨物は其代償物の有する勞働購買力の大小如何によりて、其價値を增減す、而して、購買者の見地よりすれば其購ふ貨物の價値の大小は、之が彼の勞働を省き又は他人の勞働を購買し得る程度如何によりて決定せらるるなり」と言ひて前論文よりも詳細に其所見を述べたり。(2) 即ち彼は交換過程より見て Labor-command Standard の説を採れるものなり。ボーナーに從へばアダム・スミスの價値論は其價値起源論に於ても又其價値標準論に於ても財の支配し得る勞働の分量なる説を採れるなり。されどボーナーは如何なる論據に依りてかゝる斷定をなしたるかを明示せざるが故に彼の唯一の根據はスミスが交換せんとする人に對する財の價値は支配せられたる勞働の分量の大小によるとなせるに依りたるものと見るの外なし。されど吾人は又一方に於て物を獲得せんとする人に對する物の價値が投ぜられたる勞働の分量によりて決せらるるとスミスが明言し、且 Labor-cost Standard が其第一卷第五章以外即ち價値の標準又は秤量を論ぜる條以外には著しく顯はるるを知るが故にボーナーの斷定に對しては贊意を表する能はざるなり。

（註一）Palgrave:—Dictionary of Political Economy. vol. III. p. 413.
（註二）James Bonar:—Philosophy and Political Economy in some of their historical relations pp. 156-157.

マーシアル教授のリカルド價値學説批評（上）

鈴木清吉

本篇は Alfred Marshall 教授の Principles of Economics, Appendix I を譯出せるものなり

一

リカルドの一般讀者に對するや、大に其廣汎周密なる事實上の知識に基きて論をなし、之を「議論の解説、論證、前提、」の爲めに用ひたり。

然るに其經濟學原論中にては「同じ問題をも、殊更其身邊の實際社會とは沒交渉に之を論じたるなり。」（ダンバア）而して、彼は千八百二十年五月マルサスに對し（此年マ氏は「實際適用上より見たる經濟學原論」を著せり）「思ふに吾人の意見の相違は、或點に於て貴下が拙著を、予の企劃以上に實際的のものなり、と考ふるに由ると云ふ事を得べし、予の目的は理論の闡明にあり、予が極端なる場合を想像せしは此が爲めにして予は斯くして此等諸原則の作用を明かならしめ得べしと考へしによる」。と云へり。リ氏の原論は系統的の著書と稱し難し。元來此書は友人の切なる勸奬によりて公刊せられしもの、其行論に際し心中讀者を豫期せしとせば、そは主として彼が自ら交際せし政治家、實業家等なりしなるべし。されば彼故らに其議論を論理上完全ならしむるがため必要なる多くの事項を削除せしものにて、蓋し讀者は此等の事實を自明の事と認む可しと考へしに由るものなるべし。加之彼は同年十月、マルサスに告げし如く「文才に乏し」かりしなり。彼の思想の深遠なるに反比例してその說明は混亂し、特殊の意味の用語をなしながら是を說明せず、又其用語法を一貫せしむる事なく一の假定より他の假定に移るも何等の注意を與ふることなき也。

されば彼を正當に理解せんとするには、吾人はその言說につき彼がアダム・スミスを解釋せし以上に寬大なるを要す、即ち其言の曖昧なる場合は、彼が言はんと欲せし所を其の著書中他の項目下に求め以て之が解釋に充つべきなり。吾人にして彼の眞意を摑まんがため此勞を吝まざらんか、其學說は完璧の稱こそ許し難けれ、通例彼に歸せらるゝ誤謬の多くは之を免れ得べし。

一例を擧げんか（原論第一章第一節）彼は利用は（正準）價値に「絕對的に必要」なれども之を計量するものに非ず又「存在量甚しく限定せらるゝ」物の價値は「富の程度及び是を得んと欲する人々の嗜好によりて變動す」と謂へり。然るに他の個所（同上第四章）にては市價動搖の過程は一方販賣に提供せられし量と他方「人類の欲望及希望」によりて決定せらると主張す。

更に其深遠なれども不完全なる「價値と富」との差異の論に於ては限界利用と全部利用との區別を立つるに向はんとせるものゝ如し。何者彼は富を以て全部利用を指し、價値は富の增加部分に應ずと立論するが如く、而して此場合增加部分とは買手が宛も購ひて可なりと考ふる財の量より來るものにして、供給不足の場合には偶然の出來事による一時的のものなるも、生產費增加の結果による永久的のものなることを問はず、價値によりて計らるゝ富の限界增加部分大となると同時に、財より得らるべき全體の富即ち全部利用は減少すると謂ふが如く考へらるればなり。其所論の趣旨は結局供給の制限により、限界利用は增加し、全部利用は減少す、と云はんとせしものにして、唯（微分學の簡潔なる用語を知らざるため）手際よく此意を言ひ表はすべき適當なる言葉を發見し得ざりしに過ぎざるなり。

二

然るに利用の問題につき大に論ずべきものある事を思はざりしと同時に、生產費と價値との關係に關する世人の了解不完全にして、而かも此問題に對する謬見は動もすれば租稅及財政上の實際問題に就き國家を誤るものなるを信じ、仍て特に此問題に關して論述する處ありたるなり。しかも彼は茲にも性急なりき。

蓋し、リカルドは財が報酬漸減、不變、又は漸增の法則の何れかに從ふにより三種類に分たるゝ事を知り乍ら、總ての種類の財に適用せらるゝ價値論に於ては、此區別を無視するを以て最も當を得しものと考へたるなり。任意に選擇せる財は報酬漸減及漸增二法則の、一に從ふと同じく、他にも從ふものなり。故に假に是等二法則は皆報酬不變の法則に從ふものと假定して可なりと考へたり、此點に就ては彼の所爲は必しも不可ならざるべきも、其行論の過程を明瞭に記述せざりしは彼の過失なり。

彼は第一章第一節に論じて曰く「資本の使用殆んどなく、又或者の勞働が他者のそれと、殆んど同じ價格を有する「原始の社會に於ては」「一財の價値、或は之と換へて得らるゝ財の分量は、其生産に必要なる勞働の相對量によりて定まる。」と、云ひて可なりと。即ち二物あり、一年間十二人の勞働と、四人の勞働とにて作られ各人は同じ位置に屬すとせば、前者の正準價値は後者の三倍なり。何者前者に投ぜられし資本に對し利潤として一割增加せらるべしとせば、後者に於でも一割增加せらるゝを要するが故なり。【該階級の勞働者一人一年の賃銀をWとせば生産費は 4w. $\frac{110}{100}$ 及 12w. $\frac{110}{100}$ にして兩者の比は 4:12 即ち 1:3 なり。】

然るに彼は進んで以上の假定は文明進歩せし時代に於ては妥當を欠き、價値と生産費との關係は更に遙かに複雜なるを示さんとせり。仍て右に次で第二節に於て「性質異る勞働は其報償異る」旨を論じたり。鑄屋の賃銀が工場勞働者の賃銀の二倍なりとせば、前者一時間の勞働は後者の二時間に相當せざる可からず。其相對的賃銀に變動あらんか之等勞働者の作れる物の相對的價値に、之に應ずる變動あるべき事當然なり。然れ共彼は現代の經濟學者の如く時代の推移につれ、普通勞働者に比し鑄屋の賃銀を變動せしむる諸原因の分析は之を行はず、直に如上の變動は大なる事能はずと云ふを以て足れりとせり。

第三節に至り、一財の生産費を計算するに際し、之に直接用ひられたる勞働のみならず。之等の勞働を幇助せし器具道具及建物等に投ぜられし勞働をも算入すべきことを主張し、當初留意して其背後に潛め置きし、時間的要素は此處に於て必然附加せらるゝの已むを得ざるに至れり。

從つて第四節に於て「一部の財」 A set of commodities（【製造原費 prime cost と總費用 total cost とを區別する困難を避くるため彼は屢々この簡單なる方法を用ひたり】）の價値に及ぼす諸種の影響を一層綿密に論じ、殊に一回の使用によりて消耗せらるゝ流通資本並に固定資本の充用より生ずる效果の異同を說き、更に又財を作るべき機械の製造に投ぜらるべき勞働時間につき考慮を費したり。即ちこの時間長ければ生産費大なるべく從つて「財が市場に齎らさるゝ迄に經過すべき長時間を償ふため其價値大なり。」と云へり。

最後に第五節に至り、投資期間の相違が、直接間接を問はず、相對的價値に及ぼす影響を綜括し、且つ賃銀が共に上下すとせば、其變動が異種の財の相對的價値に對する影響は一時的なりと論ず。至言なり。然れ共利潤率下落せば、市場に出すに先ち其生産に長期間の投資を要する財の相對的價値を低落すべしと說く。蓋し或場合、投費は平均一年間にして利潤として賃銀勘定書に一割の算入を要するに、他の場合は二年間にして一割二分の加算を要すとせば、利潤

五分の一の下落は後の場合には加算額二十より十六に減ずるも前者に於ては十より八となるに過ぎず。〔兩者の直接勞働原價相等しとせば、變動前に於ける兩者の價値の比率は $\frac{120}{110}$ 即ち 1.091 變動後は $\frac{116}{108}$ 即ち 1.074 下落の割合約二分なり〕彼の議論は明かに假定に過ず、後章に於て投資の期間を他所にし產業の種類異なる場合利潤相違する他の原因を論せり。しかも「時間」或は「期待」Waiting が「勞働」と同じく生產費の一要素なることにつきては之を其第一章中に論せずして他に克く是を高調力說するの途ありしや否や蓋し忖度し難き所なり。然れ共不幸氏は簡潔なる文字を喜び、其讀者は彼の與へし一の暗示（ヒント）につき常に自ら說明を補ふものと思へり。

第一章第六節の結末の註に於て正に謂へり、「マルサス氏は費用と物の價値と一致すと云ふ事を以て予が學說の一部をなせるが如く考ふるものゝ如し、氏にして費用をは利潤をも含む「生產費と考ふるに於ては正に然り。然るに上文に於て氏は此意味を云へるに非ず、故に氏は予を正しく了解せるものに非ず」と。而もロードベルトス及カール。マルクスは、物の自然的價値は之に費されし勞働のみよりなるとの說につき、リカルドに典據せるものとし、此等の論者の結論に對し極力爭鬪せる獨乙經濟學者等さへ往々彼等はリカルドを正解せるものにして、その結論はリ氏の說の論理的歸結なることを許容せり。

此一事及之に類似する諸事實はリカルドの沈默が判斷を誤らせし事を表せり。彼にして二個の財の價値は結局是等を作るに要せし勞働量に比例すと考へらるべきものなれども、此は他の條件にして等しく、即ち二個の財の生產に於て用ひらるゝ勞働は熟練の度相等しく、從つて賃銀率相等しく、生產を對助する資本額が（資本固定の期間を酌酌したるものとして）相比例し、從て利潤率等しき條件の下に於てなるを要する旨を、時々反復し置かは可なりしならん。彼は明瞭に叙述せず、又時として蓋し彼は正準價値の問題に於て如何に種々の要素が相互に影響し合ふやを完全明白に會得し得ざりしなるべく、此は長き原因結果の連鎖に於ける連續的關係に非ず。かくて彼は大なる經濟理論を短章句にて言表はさんと努むる惡癖ある人々の何れにも勝りて過を犯せる者なり。（未完）

商法判決批評

西本辰之助

一、既存債務ニ付キテ爲ス約束手形振出ノ意義

一、既存ノ債務ニ付キ約束手形ヲ發行シタル場合ニ於テ其債務カ更改ニ因リテ消滅シタリヤ否ヤハ之カ決定ヲ當事者ノ意思ニ求ムヘク當事者ノ意思不明ナルトキハ既存債務ノ辨濟ヲ確保スル爲メ該手形ヲ發行シタルモノト認ムヘキモノニシテ之ニヨリ當然債務ノ更改アリト爲スヲ得サルモノトス

（大正七年十月大審院第一民事部判決）

本判旨は正當なり既存債務に付きて約束手形を振出すことは債務者の側より見て何等の利益あるものに非す從て其振出行爲は債權者の爲め